

今、子育てに求められていること

—母と子のふれあいの実際からの考察—

伊藤 渥子 永見 小夜子 石川 克子 梶川 公代 松井 和子
姉川 美恵子 磯部 裕子 兼定 小百合 野瀬 由美子 吉田 緑
(母と子の生活研究所)

<要 旨>

子どもは母親とのふれあいの中で、気持ちが受け容れられると安定し、意欲的に過ごすことができ、望ましい発達が見られる。母親も子どもとふれあい、気持ちが通い合うという経験の中から“親としての心の育ち”を体得していくのではないだろうか。当研究所では、母と子が一緒にあそび、かかわり合う活動を通して、子育ての根幹をなすものについて追究してきた。研究員が行っている「母と子のプレイルーム」の実践の中で、母と子のふれあいが希薄になっていることや、子どもへの共感と見守りが適切でないなどの問題が共通にあるように思われる。本研究は、「共感と見守り」に焦点を当て、さまざまな事例や記録の中から母親の気持ちにふれ、保育者としてどうかかわり援助していくか考察した。その中で、母親の気持ちの理解と受け止めが大切なこと、母親同士の育ち合いを側面から援助する働きをすること、さらに母親が子どもを育てる喜びを実感できるようなかかわりも重要であると考えられた。

<キーワード>

子育て支援、共感と見守り、母親同士の育ち合い、保育者のかかわり、母と子のプレイルーム

【はじめに】

子どもとどのように接して気持ちを通い合わせたらよいのか、何を大切にどう対応したらよいのか分からず子育てに自信がもてないなど、母親の子育てに関する悩みは多く、深いものがある。それは特別なことではなく、子育て事情が大きく変化してきた現代では、誰にでも起こり得ることと考える。赤ちゃんに触れたこともないまま母親になり、地域からの働きかけや支援の薄い中で子育てをせざるを得ない現状。そんな社会事情や環境の変化の中で、母親が子育てをすることは大変難しくなっている。

昨今の少子化に加え、子育ての孤立化などの現象を捉え、行政や民間で子育て支援の活

動がさまざまに展開されてきている。その一つである子育てサポート（託児）の制度は、働く母親のみならず子育ての難しい環境にある母親にとっては、子育ての負担が軽減され大変有効である。しかし、安易に長時間保育などを利用することで親子がふれあう貴重な時間を失い、そのつながりが希薄になる側面があることを忘れてはならない。大人の生活面への支援だけでなく、子どもの側から考える支援の広がりが期待される。

【方法】

<研究対象>

「母と子のプレイルーム」の場。親子 250 組。

＜母と子のプレイルームとは＞

未就園の幼児と母親（養育者）を対象とした週1回、90分の集い。親子の主体的なあそびを中心とした活動で、その時期、その子どもたちの発達に添ったカリキュラムを基にあそびを展開し、子どもも母親もかかわりを広げ仲間と共に子育てを楽しむことをねらいとしている。プログラムは、テーマあそび・親子体操・お話・絵本・おやつ・母親の活動（テーマあそび…わらべ歌、ボール、ごっこあそび、絵の具、小麦粉粘土、フィンガーペイント、新聞紙あそび、遠足、いもほり、お楽しみ会など。母親は子育ての話し合い、出し物などの準備や活動も行う）

＜研究方法＞

1) 事例研究：実践の場における母子の観察と記録を基に、研修会で研究員相互の話し合いを通して考察する。本研究では、子どもへの「共感と見守り」を、母親に視点を置き保育者としてどうかかわればよいか下記のテーマでディスカッションを継続した。

月	ディスカッションのテーマ
4	子どもの気持ちを受け容れる
5	子どもと母親の環境の変化
6	気になる子ども、気になる母親
7	母親の育ちと子育てとの関係
8	母親の意識について
9	母親同士のかかわりあい
10	子どもの気持ちと社会生活
11	子どもと母親との関係
12	見守り受け止めるということ
1	保育者のかかわり
2	母親の気持ちを受け止める
3	母と子の気持ちのずれへの対応

母と子への見方がひとりよがりにならないように、より客観的に捉えるため研究員相互に関連すると思われる事例を提示し考察した。

2) 「マザーズダイアリー」から見えること
 “マザーズダイアリー”とは、カリキュラムの中に設けられた母親が記入する欄。子どもの成長や母親の子育てについて、日常生活の中で気づいたこと、思ったことなどの記録。項目は「運動、生活、友だち、ことば、子の気持ち、母の気持ち」の6つが設けられている。今回は「母の気持ち」の項目に焦点を当て、記録を基に保育者同士のディスカッションを通して考察した。

- ・対象：記入者45名（1～4歳の子の母親）
- ・期間：1999年より2002年

子育てが辛いとき、母親はイライラするということばで表現することが多い。母親の記録によると、35名中20名からは楽しんで子育てをしている様子が伝わってくるが、15名はイライラすると記述している。さらにその15名のうち13名は、子どもが2歳の頃が最も対応が難しいと表現している。「頭にきたり、腹が立ったり、あたりちらしたり・・・子どもの強情さにこちらもむきになってしまう」と気持ちを表わしている。また、2歳の頃はイライラして叱ってばかりの母親もその半数は、子どもの成長や周りのかかわりもあって3歳半を過ぎる頃には子育てが楽になっていく様子も見られる。「どうしてこんな優しい子になってくれたのか…子どもから教えられた」と素直な喜びが表わされている。

- 3) 子育てに関するアンケートから
- ・対象：プレイルーム会員（母親）
 - ・部数：250部配布、150部回収

(150名、20の質問の一部、複数回答)

・問①「この子がいてよかったと思うのは」
笑顔を見た時…127名、寝顔を見た時…82名、
抱いた時…71名、気持ちが通じた時…68名、
その他に成長が見られた時、楽しく過ごせた、
母を慰めてくれる、優しさを感じる時など子
どもと共にいる幸せが表わされている。

・問②「子育てが楽しいのはどんな時」
笑顔を見た時…46名、成長を感じた時…30
名、あそんでいる時…16名、気持ちが通じ合
う時…9名、その他に一緒に過ごす時、母が
好きと表現した時、兄弟仲良しの時に子育て
が楽しいと感じている。

・問③「子育てが辛いのはどんな時」
自分の体調が悪い時…40名、自分の時間がな
い時…22名、気持ちが通じない時…11名、
グズグズ言う時…8名、自分が忙しい時…7
名、言うことを聞かない時…7名、その他に
子どもの体調が悪い、あそびに連れて行けな
い、他児とあそべない、発達が遅れているな
ど。また、辛いと感じている時、夫が好きな
ことをやっているのを見ると自分ひとりで子
育てをしているという孤独感を感じるという
記載もある。

【事例】

◎事例1. 木登り Aさんの場合

何人かの子どもたちが高い木に登ろうとして
いる。そばにいた母親は少しお尻を支えたり、
木に足がかかるように手を置いたりして手助
けをしている。Aさんは「順番よ」と我が子
を待たせ、番がきたらさっさと子どもを抱い
て上にあげた。木に乗ったかなと思ったらす
ぐ抱いて降ろし次の子に代わった。子どもは

満足できない様子でずっとグズグズしていた。

◎事例2. 風車を返さないbの母Bさん

bちゃんはfちゃんの持っている風車がほし
くて貸してもらった。しかし帰るときに返す
ことができなくて、Bさんは困っている。何
とか返してくれるように「これはfちゃん
のよ、あなたのではないね。借りただけね」と
我が子の気持ちを感じて説明している。しか
しbちゃんはなかなか返す気にならない。保
育者が「fちゃんのだから返しなさい」と言
うとbちゃんはすんなりと返した。

◎事例3. 母親色に染まる

Cさんは楽しんで子育てをし、子どもの好み
が自分の感性と共通することを嬉しく思っ
ている。ある日、ヨーイドン!で好きなもの
をとってくるというゲームあそびをした。c
ちゃんはキャラクターの絵のついたノートを選
ぼうと手にしていた。そばでCさんが別のも
のを見て「ママはこっちの方が素敵だと思う」
とさりげなく言った。それを聞き、cちゃん
は迷いながらもそちらを選んだ。

◎事例4. Dさんのいつまで抱っこ

Dさんの子どもが誰かに背中を踏まれたよう
で、お母さんの足元にすがりつき泣きながら、
「抱っこして、抱っこ」とせがんでいる。D
さんにはその気がなさそうだったので、私(保
育者)は「抱っこしてあげて」と言った。D
さんは「この子はすぐ抱っこしてと言う。何
で抱っこばかり言うのでしょうか」「きっと不
安なんだよ。ぎゅっていっぱい抱っこしてい
るとそのうち離れていくものよ」と私は言っ
た。すると、Dさんは「ぎゅっと抱っこして
いればあと何週間ぐらいで離れていくのでし
ょう」

◎事例5. 母親が変わっていく様子

乱暴な行動をしがちなeくんは、地域の公園の子どもたちや母親になかなか受け容れられなかった。ある時、Eさんはプレイルームを知り入会を決めた。

4月：手当たり次第そばにいる子を突き倒すeくん。母親との関係が希薄で心の通い合いがうまくいっていなかった。保育者はできるだけふれあいの時間を持つように母親に話し、カリキュラムの工夫もした。いくつかの段階を経て、落ち着きを見せるようになる。

10月：突然、友だちを突き倒す、のしかかる、ぶつかっていく、目を狙うように顔に手を出す。友だちの持っているおもちゃを取り上げ、それで頭をぶつなどの行為を繰り返す。eくんが、友だちの目を指でつつこうとしたので、保育者は思わず「お顔はダメ！」と強く制止した。eくんがいる所ではいつも誰かが泣いているという状況になり、そのために気まずい空気が流れる一日。保育者は、このまま終わりにしてはいけないと思い、おやつ時間にeくんのことをみんなで話し合った。

- ・母親たち：eくんの行動を一時のものとして受け容れるような発言が多かった。
- ・Eさん：最近家でも同じだと困った様子。
- ・Gさん：「・・・・・・・・・・」

保育者は、Eさんを責めるような発言が皆からなかったので、eくんの様子を分かってあげよう、受け容れようという内容を話した。
その後の様子：プレイルームを欠席していたHさんより電話がある。Eさんの気持ちを汲みながらも、Gさんの子どもがeくんを怖がっていて気の毒なこと。そのためにプレイルームをやめたいと言っていることなど、あり

のままの気持ちを保育者と長時間話し合う。保育者はGさんに連絡し、eくんが側にくると怖くて逃げていることなど素直な気持ちを聞く。1週間後、保育者は、母親たちに「支えてくれてありがとう」と話す。Hさんの呼びかけで母親同士が公園にあそびに行く様子が見られた。保育者はクリスマスの出し物を母親同士で相談してくれるよう話した。母親たちは、何度も学習センターに集まり準備をしたり新年会などの交流を持つ。Eさんの表情が明るくなり、自分のことや夫のことなどを話題にして他の母親とも話し合う姿が見られるようになる。

3月：おわかれ会

どの子どもとても穏やかにあそぶ。Eさんは子どもたちに紙芝居を読む。そして、「家でeに聞いてもらって何度も練習したんです」と嬉しそうに言った。他の母親も穏やかな表情で、退会せずに続けてよかったと話す。

【考察】

1. 子どもへの共感と見守り

1) 子どもの気持ちが見えない母の姿

自分の側からばかり見ていて、子ども本人からすればどう見えるのかという視点に欠けがちな大人が多いのではなかろうか。子どもの行動を乳幼児期の発達過程では当然のことと理解し、子どもを外側からのみ見るのではなく子どもの気持ちの内面を受け止めて欲しいと考える。事例1. では、子どもは木に乗りたいたのではなく登りたかったのだ。自分で登ったという達成感を味わいたかったのだと思える。母親は後ろに待っている子どもたちのことが気になり、子どもの登りたい気持ち

ちより木に乗るという行為を優先している。母親自身は一生懸命に子どもとかかわっているつもりだが、子どもの思いと大きくずれている。

- ・母親は、木登りの醍醐味を知らないから子どもに登らせようと思えないのかもしれない。
- ・経験していたとしても、子どもの頃のことを忘れ、周囲のことが気になってさっさと降りたのでは、などの考え方が提示された。

この事例のようなかわりが繰り返されると、子どもの意志の働く余地がなくなってしまふように思う。あとあとまでグズグズした態度から、気持ちが満たされずに落ち着かないことが分かる。

◎ある母親の記録から「子どもの行動に対して周りの目がとても気になります。必要以上に細々と指示をしたり、子ども同士であそぶ時も自分の子を我慢させておもちゃを無理やり貸してあげたりしていました。そのせいかお友だちにおもちゃを貸せなくなり、私に聞いてからでないと行動することができなくなりました。私は不安になり、それからは、なるべく口を出さないと見守るようにしています。」とある。このように、周囲のことが気になり、子どもの気持ちを十分に汲み取れない母親の姿は多々見受けられる。

2) 子どもへの共感と努力する母親

子どもの気持ちを尊重することは大切とそれに向けて努力している人は多いのだが、尊重し見守るあまり言いなりになってしまう場合も見られる。事例2. は風車に興味を持っている我が子の気持ちを汲みすぎて周りが見えない例である。他の子の気持ちを考えることや、社会の中の一人として生きることを母

親がしっかりと認識していないと、子どもは自己中心的な行動になったり混乱してしまったりする。母親は自由に伸び伸びとということのを浅く捉え、それにとらわれ過ぎているように思える。どこまで自由にしてよいのか、見守ること、止めることの程度に母親は悩んでいるようだ。

◎母親の記録から「泣いて思いを通そうとする子どもに、やってあげてもよいのか甘やかしになるのかと思ひ迷う。うるさいので言うことを聞いたり、『泣かない!』と一喝してねじ伏せたり。どこまで手を出したらよいか、どこまで子どもに任せていけばよいか分からなくなる。」(マザーズダイアリーより)

3) 頭で分かり理解しているつもり母親

母親たちは子育ての本を読み講演を聞き、子育てについて理解し把握しようとしているが、実際の自分の子育てにどのように生かしているのか疑問がある。日頃からよりよいものに触れさせたいと熱心に働きかけをしている事例3. のような母親は多い。子どもの気持ちを分かり、表面的には子どもに任せているようであるが、そこには自分の描く子どものイメージに当てはめようとする意図がうかがわれる。それが行き過ぎると子どもを精神的にコントロールしている結果になる。「子どもは、生来その子らしく生きようとする力をもっている」という大切なことを見失っているのではないか。母親が、子どもは自分とは別の人間であること、子どもの主張は大切にしようと感じていくことが重要と考える。

4) 慈しみの気持ちを自然に表わせない母

現代の母親は、学歴中心の社会で育ち勉強が最優先の生活をしてきた。社会に出てから

は、機能性、合理性が求められ、それが身についている。それと比べて、子育ては非合理的に見え思い通りにもならない。頭で考えることを優先してきたマニュアル世代の母親には自然に抱きたくなるような母性や本能のような感性があまり育っていない場合がある。人間本来の感性を大切にしながら育ち、子どもの気持ちを感じ世話をしてきた母親は、子どもを抱っこすることが自然にできるようだ。事例4. の母親の「あと何週間抱けばよくなるのか」という質問の背景には、地域の中に子育ての風景が少なくなり、子どもに触れたこともなく、子どもの実際の姿を知らない状況が感じ取れる。そこでは、子どもと気持ちが通じ合うことが難しく、子育ての勘が育ちにくくなっている。

2. 母親たちの働き

母親の気持ちに余裕ができたとき母と子の関係は安定し、また母親同士のかかわりによって解決されていくことも多い。母親同士のつながりができると他の子への関心が広がり、ゆとりをもって接することができるようになる。事例5. からは、母親同士のかかわりの中で母親自身の変化し、子育ての楽しさを見つけていく様子が見えてくる。子どもの乱暴な行動は何を意味しているのか保育者との話し合いで気づき、母親たちとのかかわりによって周りから理解され気持ちが楽になっていく。また、初めは他の子をうまく受け容れられなかった母親が、周りの子どもや他の母親の気持ちをわかるようになり、仲間意識が生まれ子育てを楽しいと実感していく。乱暴を受けた子どもと母親もさまざまな心の葛藤がありながらそれを乗り越えていく様子が見

きりと伝わってくる。乗り越えたときはその大変さが、喜びに変わっていることが多い。

母親は時には子育てを楽しみ、時には苦痛に感じ、双方の感情の中で子育てをしている。マザーズダイアリーや子育てアンケートの中にもそれは見られ、次のことばが母親の気持ちをよく表している。

◎「イヤ！」を連発している2歳児の母親

「反抗期と分かっている毎日続くと耐えられなくなる。言い合いをして辛くなる時はできるだけ長く外に出るようにする。」「朝、起きると抱きついてきてほっぺを私の頬にぴったりとつけてくる。自分の自由な時間がなく辛いと思う反面すごく嬉しいこと。」

◎母親の記録より「一生懸命育児をしているつもりですが、私が子どもの自立心や可能性の芽を摘んでしまっているような気がしてなりません。他のお母さんたちも、いつも元気で明るく笑っているけれどみんな結構悩んでいるんですね。私たち親子にとって心強い仲間ができたのでとても嬉しく思っています。」

保育者が母親同士の話し合いの時間を設定したり、共に取り組む作業などのきっかけをつくることで、母親はお互いの持ち味を出し合いかわりを深めていく。保育者の受け容れや見守りの中で母親が心を開き、信頼感をもち、もっている力を発揮することができる。

3. 保育者のかかわり

母親と子どものやりとりの中で、母親が子どもの気持ちを理解できず、子どもを叱ったりイライラしていることがある。そんな時、保育者は子どもの気持ちを代弁することが多い。母親はそれで納得することもあれば、疑問に思いながら口を閉ざすこともある。保育

者同士がディスカッションを進める中で、今の時代においては、母親の気持ちも理解し、共感していくことが大切だと気づいた。母親にもそれぞれ思いがある。心の問題に対し短絡的に回答を出すことはできないが、一人の母親の中にもさまざまな心の葛藤があることを認識する必要がある。さらに母親の育った環境、家族や周囲とのかかわり、教育環境など多様な状況の中で生活をしていることを理解し、受け止めていくことが大切だと考えた。

母と子の気持ちの食い違いを保育者はどう捉えていくか、一人ひとりへの個別的な対応と共に、母親同士で考えられるように話題を提供し、母親が自分自身で気づくように働きかけることが大切だと考える。母親は、不安が多い時に自分を否定されると辛くなる。現在の孤立しがちな子育て環境を考えると、身近な人からの肯定的なメッセージが母親の心に届くことが肝要だ。

母親の気持ちを理解し受け容れ、その立場に添うかかわりをしていく、そのような関係をもち続けることで母親の緊張が解け、不安も和らぎ自己肯定感に満ちて自信がもてるようになる。母親が安心して自信をもつようになると、子どもに対しても受け容れることが容易になり、子どもとの豊かなかかわりが生まれる。気持ちのゆとりが母子関係の安定を築き、子育てを楽しめるようになるものと考えられた。

【おわりに】

子育ては母親一人で負うものではないが、乳幼児期の子どもにとって母親の存在は大きくそのあり方が強く影響する。

保育者として、研修を重ねるたびに子どもと母親の気持ちに近づいていることを実感した。人の気持ちの奥深さに改めて気づき、結論を出し切れるものではないと考えた。また、ディスカッションをする中で保育者自身が変化し、子どものためにと考えて始めた研究が、母親のため、保育者自身の学びとなっていることに気づいた。そして、これまでの実践を基に考えを構築できたこと、またその過程が保育者の意識の変化につながったことは意義深い。子育ての支援には「子どもの側から考える」という視点が重要であることも、本研究で再認識した。

今後は、今回集計をしたアンケートと母親の記録のマザーズダイアリーから母親の気持ち、母親の子育てへの意識についての考察を課題としていきたい。

<参考文献>

- ・丹羽洋子 著「今どき子育て事情」
ミネルヴァ書房 (1999)
- ・三沢直子 監修「完璧な親なんていない！」
ひとなる書房 (2002)
- ・小出まみ 著「地域から生まれる支えあい
の子育て」 ひとなる書房 (1999)
- ・中野由美子、土谷みち子 編著「21世紀の
親子支援」 ブレーン出版 (1999)
- ・原田正文 著 「こころの育児書」
エイデル研究所 (1999)
- ・乳児保育研究会編 「乳児の保育新時代」
ひとなる書房 (2000)